

# 科学的社会主義の世界観を学ぶ

はじめに——なぜ科学的社会主義を学ぶのか

○マルクスが注目される時代

○活動の指針として

- ・ 結論的命題を覚えるのではなく、マルクス、エンゲルスの考え方、精神を学ぶ。
- ・ そのためには、マルクス、エンゲルスの著作そのものへの挑戦が不可欠。

○「歴史のなかで読む」

- ・ 著作の目的や前提、歴史的背景をつかんで読む。
- ・ マルクス、エンゲルスの思想や理論の発展のなかで読む。
- ・ マルクス、エンゲルス以後の歴史と自然、人間の知識の発展をふまえて読む。

## 一、唯物論と弁証法

(1) 唯物論と観念論

- ・ 唯物論——自然や社会は客観的に実在し、自分を含む人間は、その一部である。自然や物質が本源的であって、人間の感覚や意識は、物質である脳・神経の働きである。

- ・ 観念論——人間の意識や精神こそが本源的。人間の意識から独立した客観的存在などというものは実在しない。世界は、人間の意識や精神によって成り立つ。

○どちらが「本源的か」であって、どちらが大事かではない。

(2) 自然科学の発展と唯物論

○生命とは

- ・ 「生命とは、蛋白質の存在の仕方である」（エンゲルス）

○意識とは

- ・われわれの意識や思考とは「物質的な身体器官、つまり脳髓の産物」である。精神は「物質の最高の産物」（エンゲルス）

(3) 弁証法的なものの見方の特徴

- ・弁証法——①物事を全般的な関連のなかで、②生成と消滅、運動と変化のなかでとらえる。③固定的な境界、「不動の対立」にとらわれず、「反対物への転化も視野に入れて、物事をとらえる。
- ・形而上学——①物事を個々ばらばらに、②固定した、変化しないものとしてとらえる。③ “白は白、黒は黒”という絶対的な対立のなかでしか物事をみない。「石頭式」のものの見方。

○マルクス、エンゲルスの立場

- ・「弁証法的諸法則を自然のなかへ持ち込むことは問題にならない」（エンゲルス）
- ・自然科学の領域において画期的な発見がなされるたびに「唯物論とはその形態をかえなければならぬ」（エンゲルス）

## 二、史的唯物論

(1) 社会や歴史を唯物論的にとらえる

- 社会を見ると、経済を土台にして見る。
- ・生産関係の総体が社会の「実在的土台」。
- ・政治や法律制度、哲学・思想・宗教など（イデオロギー）は、その土台に照応した「上部構造」。

○すべての歴史は階級闘争の歴史である。

- ・複雑な社会関係の基礎をなしているのは階級と階級との関係。
- ・階級関係の基礎は、生産において占める立場、役割の違い。中心は、生産手段を持っていくかいないか、自分で労働しているか他人を労働させるか、等々。

○これまでの人類の歴史は、経済の型の変化によって、大まかにいって4つの社会形態の発展段階を経てきた。

生産関係によって社会の経済の型（「経済的社会構成体」）が決まる。

【原始共産制】 人類の歴史の初期の段階。人々は共同体に属し、みんなで働き、労働の成果もみんなのもの。搾取も階級もない社会。

【奴隷制】 奴隷主が生産手段を所有するだけでなく、奴隷自身も「ものを言う道具」として所有された。

【封建制】 農民は、農具などは自分で所有して働くが、最大の生産手段である土地は領主のもの。農民は身分制などで土地に縛り付けられ、領主の農園で働かされるか、剰余生産物を年貢の形で取り上げられるかした。

【資本主義】 主要な生産手段（工場、機械）は資本家階級が所有。働き手である労働者は、生産手段を持たず、自分の労働力を資本家に売って生活せざるをえない。

(2) 史的唯物論は常識になった

○歴史の始まりの段階に、階級・身分の違いのない平等な社会が存在した——日本でも世界でも。

○歴史教科書でも、各時代の違いを、経済制度の違いを基礎にとらえる。

(3) 日本の階級構成

○労働者階級が8割を占める

	1960年	2005年
労働者階級	50・5%	↓ 80・3%
農漁民	44・6%	↓ 4・2%
都市型自営業者	15・0%	↓ 11・1%
資本家階級	1・9%	↓ 2・8%

○独占大企業の支配がすすむ

資本金一〇億円以上の法人企業の占める割合（「法人企業統計」）

企業数	資本金	経常利益
一〇億円以上	0・21%	56・9%
一億～一〇億円	1・02%	13・2%
一〇〇〇万～一億円	42・1%	28・0%
一〇〇〇万円未満	56・7%	1・83%

トヨタ自動車だけで、経常利益1兆5552億円（2006年）

### 三、資本主義の矛盾と未来社会

(1) マルクスは資本主義の社会をどう見たか

○「資本主義」の名付け親はマルクス

○資本主義は、人間社会の永遠に続くあり方、最終的な到達点ではない。

○資本主義の歴史的な限界性をどこにみたか。

・あれこれの衰退現象に資本主義の限界をみるのではなく、「生産のための生産」「もうけのためのもうけ」（利潤第一主義）に突き進むところに資本主義の限界を見た。

○資本主義の発展の中で、新しい社会をつくる担い手とともに、新しい社会の経済社会をつくるのに役立つ要素がつけられる。

・客観的な条件、要素として

——大規模な協業にもとづく労働過程、科学の意識的な技術的応用、土地の計画的利用、労働手段の大規模化と節約、世界市場の網のなかへのすべての国民の編入。

——株式会社

——銀行制度の発展

・未来社会の担い手、主体的な条件として

——「資本主義的生産過程そのものによって訓練され結合され組織される労働者階級」

（「結合した生産者たち」）

——自由な個性の発展。

(2) マルクスの未来社会論

○キーワードは「生産手段の社会化」

——マルクスが運動を始めたころ、当時一般的だったスローガンは「財貨共有制」。

——『共産党宣言』（一八四八年）では、それに代えて「私有財産の廃止」に。

——経済学の研究のなかで、社会化の対象は生産手段だけであり、各人の生活（消費）

手段は充実・保障（「個人的所有の再建」）されるということが明確に。「生産手段の社会化」。

○自由の全面的な発展——「必然性の国」と「自由の国」

以上